

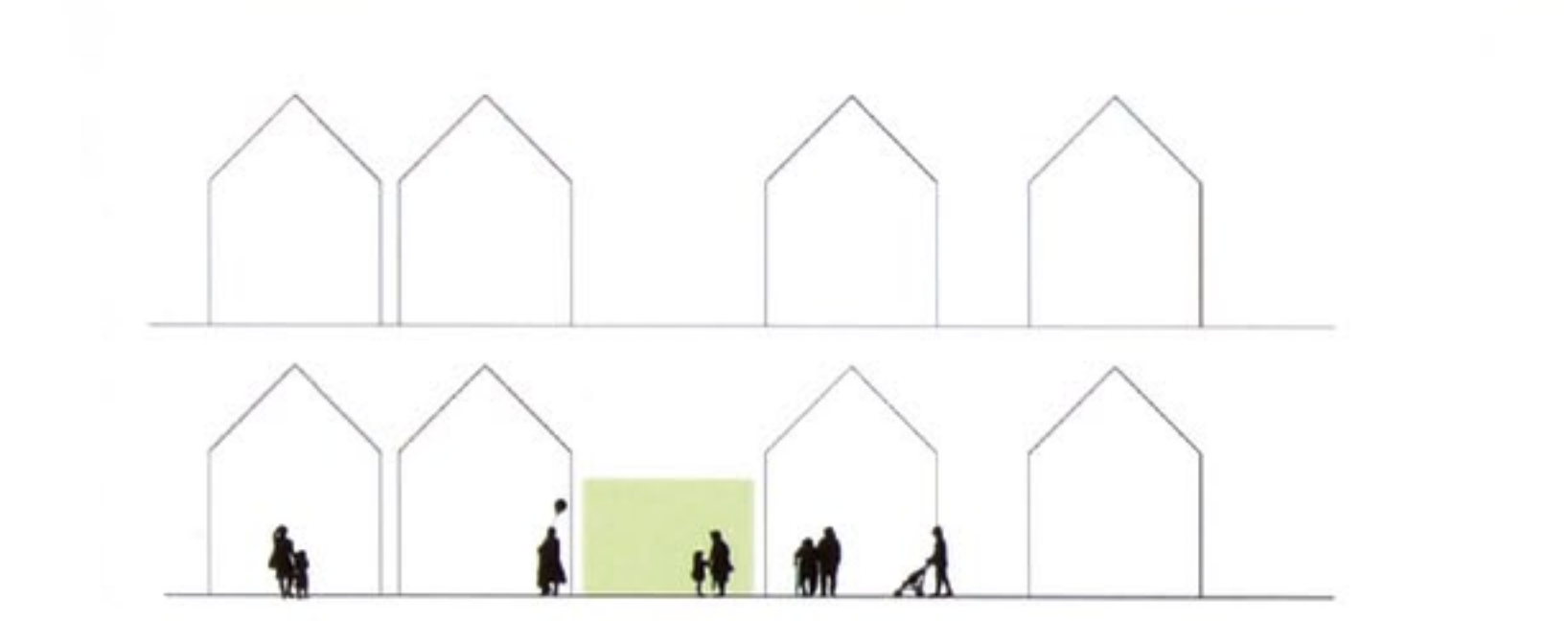


道草繋ぎ

第24回建築環境デザインコンペティション 『地球に生きる』

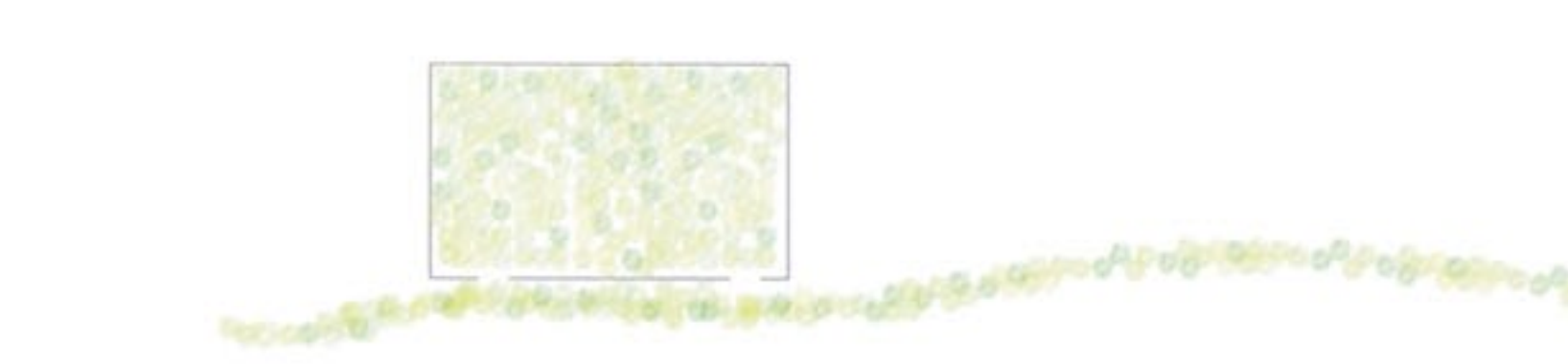
「環境」を知ること、身の回りにある小さな空気に意識をむけること。
 地方都市、静かに縮小していく都市で、大きなランドスケープのような建築を提案する。
 この建築は、人々に憩いの場所を提供するだけでなく、ただそこにあるだけで、ある意味をもつような建築となる。

場所の感覚を残しつつ、そっと変えること。



今まで道が掘り向かなくなったような都市のすき間、そこに道もが使える、小さなガラスの箱を挿入する、今までと同じ風景だけど、少し快適な空間、ここが、この都市の新しい公共施設となる。

溶けることで、つながる道



一本の都市の廃熱を利用することで、ガラスの箱は地下でひとつながりになる。その熱は、大地の雪を溶かし、そこに一本のみの道の発生させる。それぞれのガラスの箱は互いにつながり、連続したひとつの建築となる。

環境が生まれる。地球と向き合う。

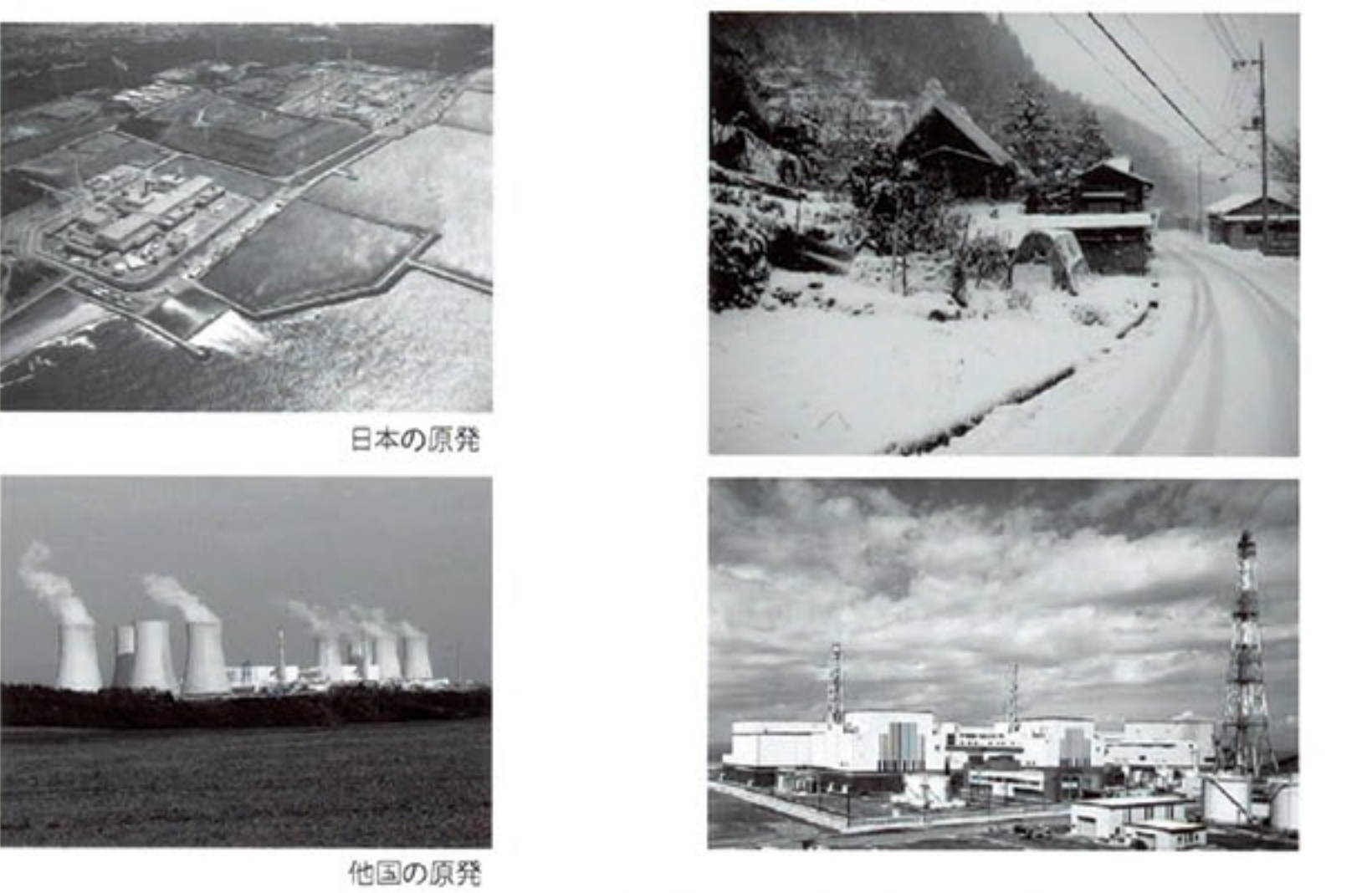


温室は、教室として使われたり、ギャラリーとして使われたり、カフェになったりする。そしてこの温室を使う人自身が、植物の種をまく、植物を育て続けることで、この大きな日とつながりの建築は生きつづき、私たちも使い続ける。



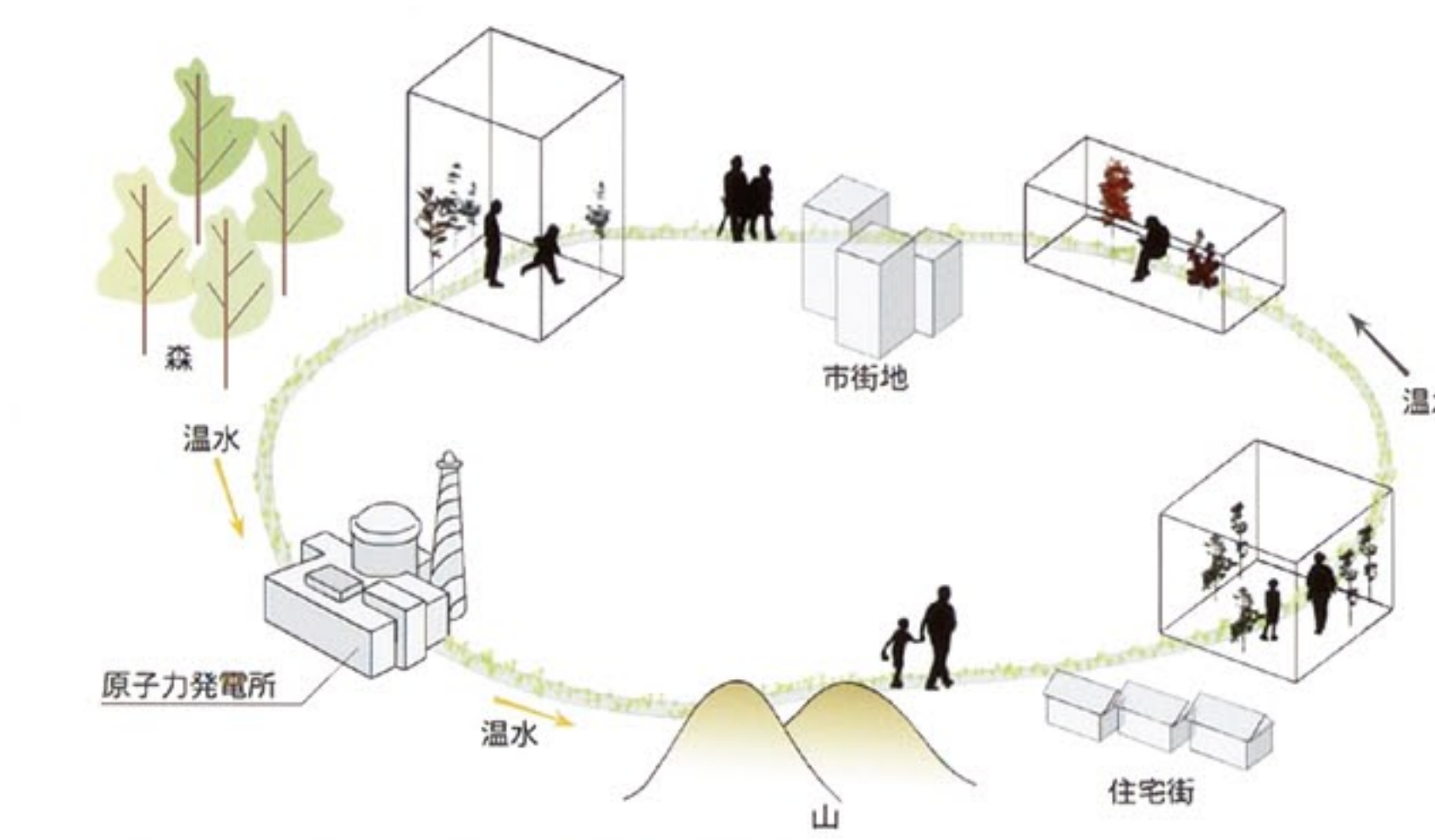
日本国内の原子力発電所

2010年現在、日本では54基(合計出力4884.7万kW)の商業用原子力発電所が運転されており、日本における電力量の約30%を占めている。
 海外の原子力発電所では、発電の際に排出された熱を外部へ排出するために、冷却塔が設置される。それに対し、日本の原子力発電所は海や川にそばに建設し、熱を温水の形で海や川に排出している。その結果、海水の温度上昇、生態系への影響が危惧されている。



原子力発電所のある北国の街

提案する敷地は、日本国内の原子力発電所のある北国の街。ここは原発によって暗い印象を持たれており、活気も特徴も失った街である。



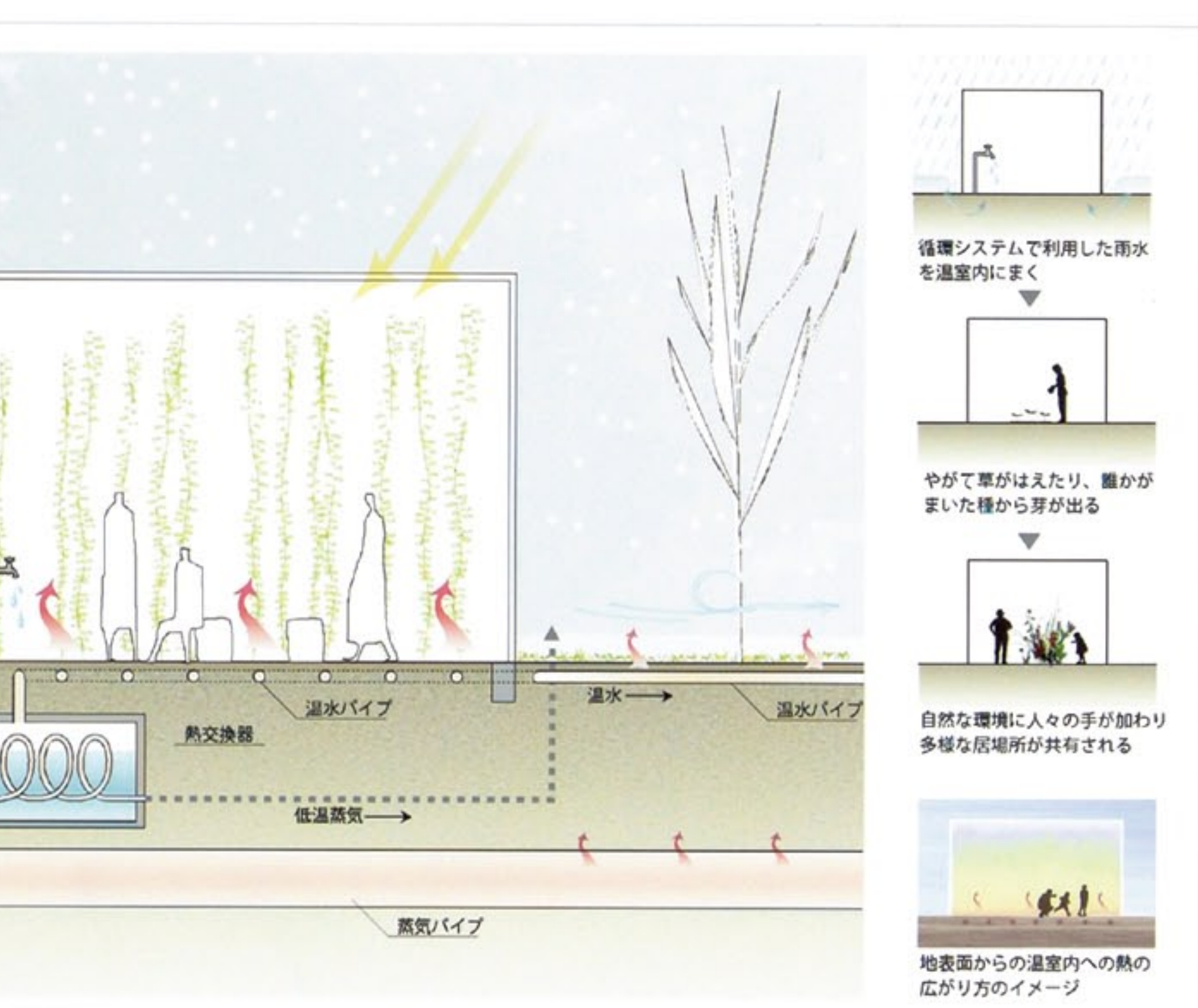
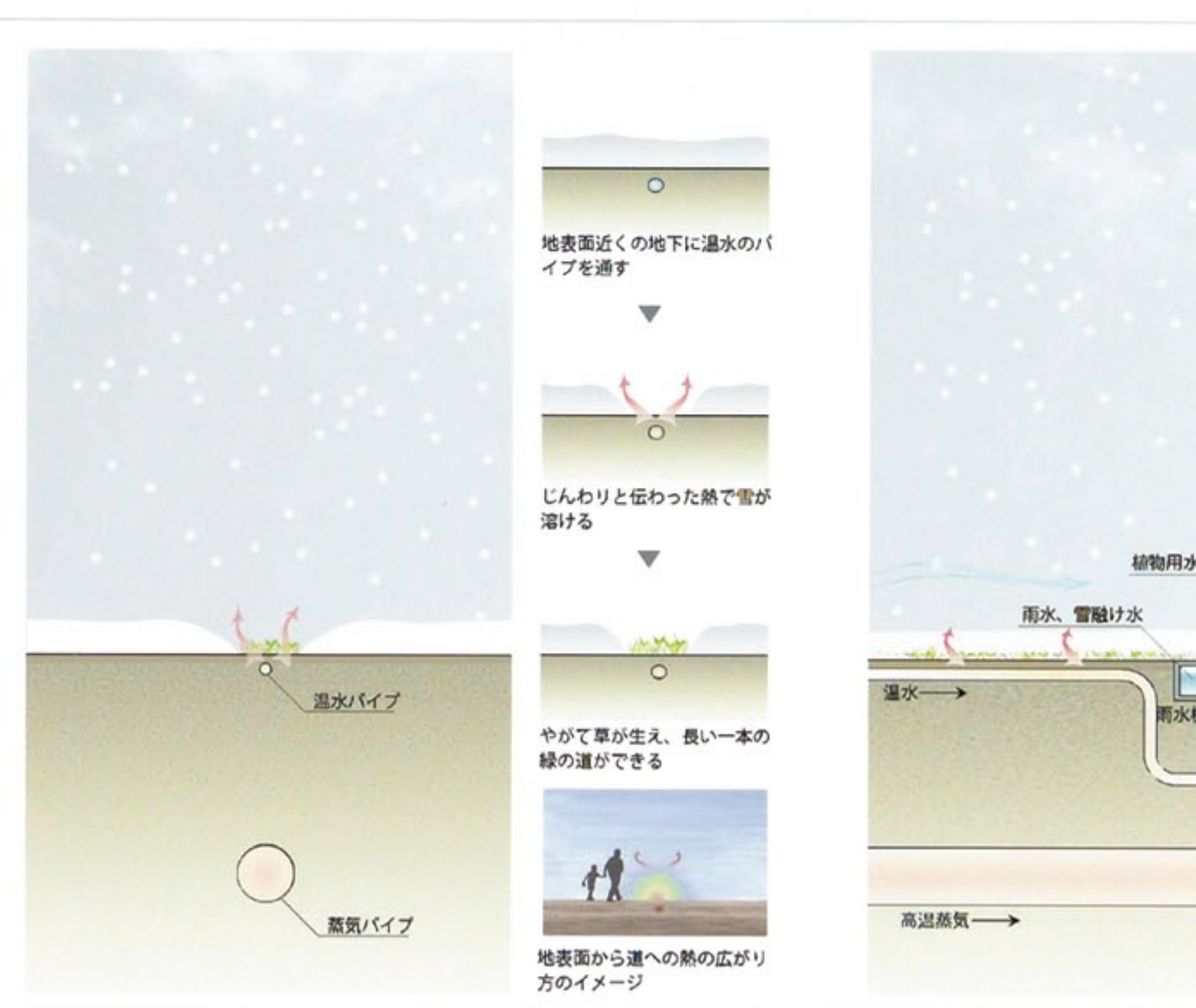
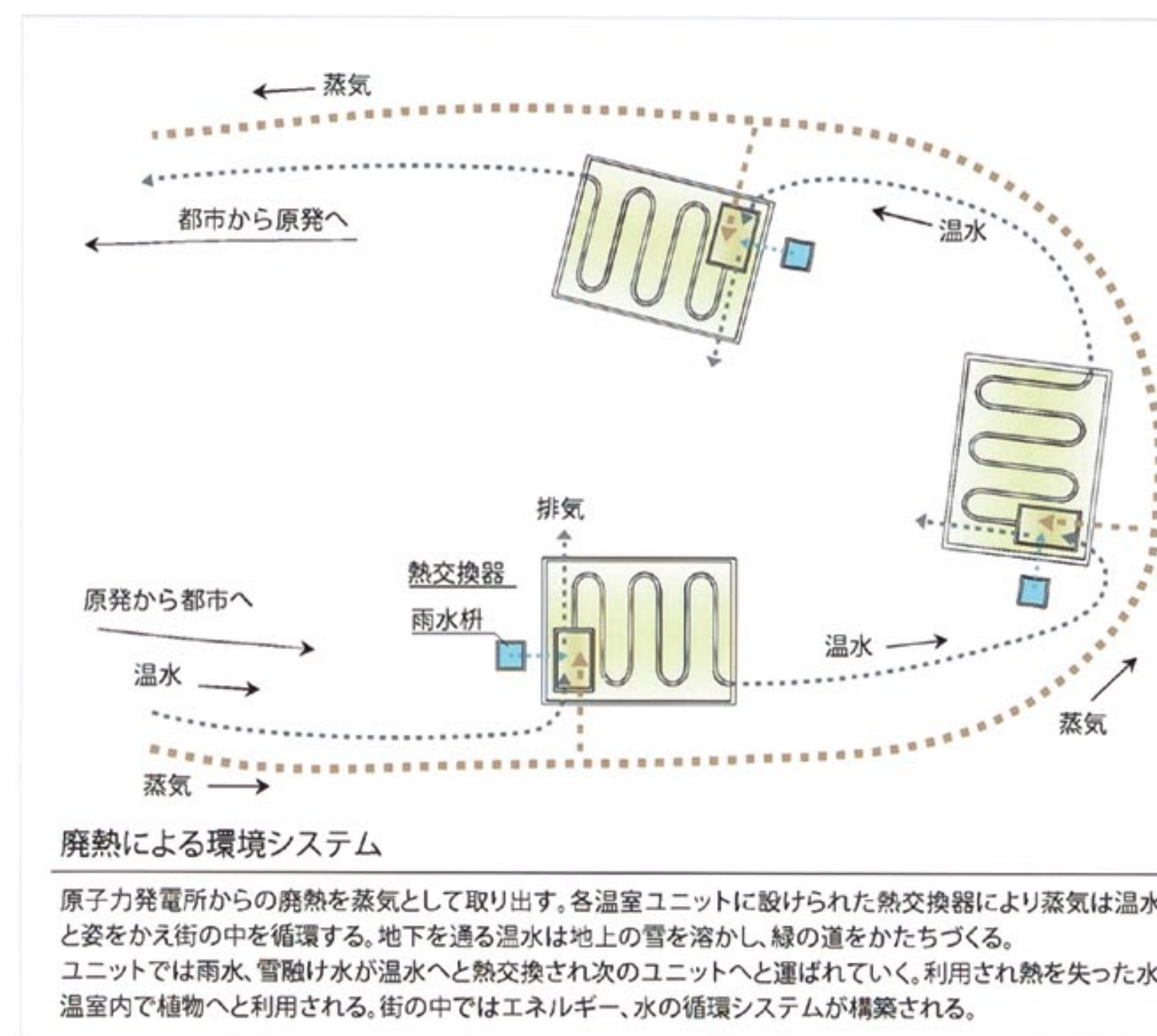
廃熱を利用した、雪国の人々のあたたかな居場所

現在海へと捨てられている大量の熱を活用する。廃熱を温水のかたちでパイプに渡し、街へと運んでいく。街の各所に、循環システムを利用した温室のようなものを置き、温水の流るパイプでつなぐ。廃熱によってじんわりと温められた土の上の雪は溶け、やがて草花が育つ。周囲より少しだけあたたかい環境に人々が寄り合う。こうして街全体には街の人々の居場所となる一本の緑の道が形成される。

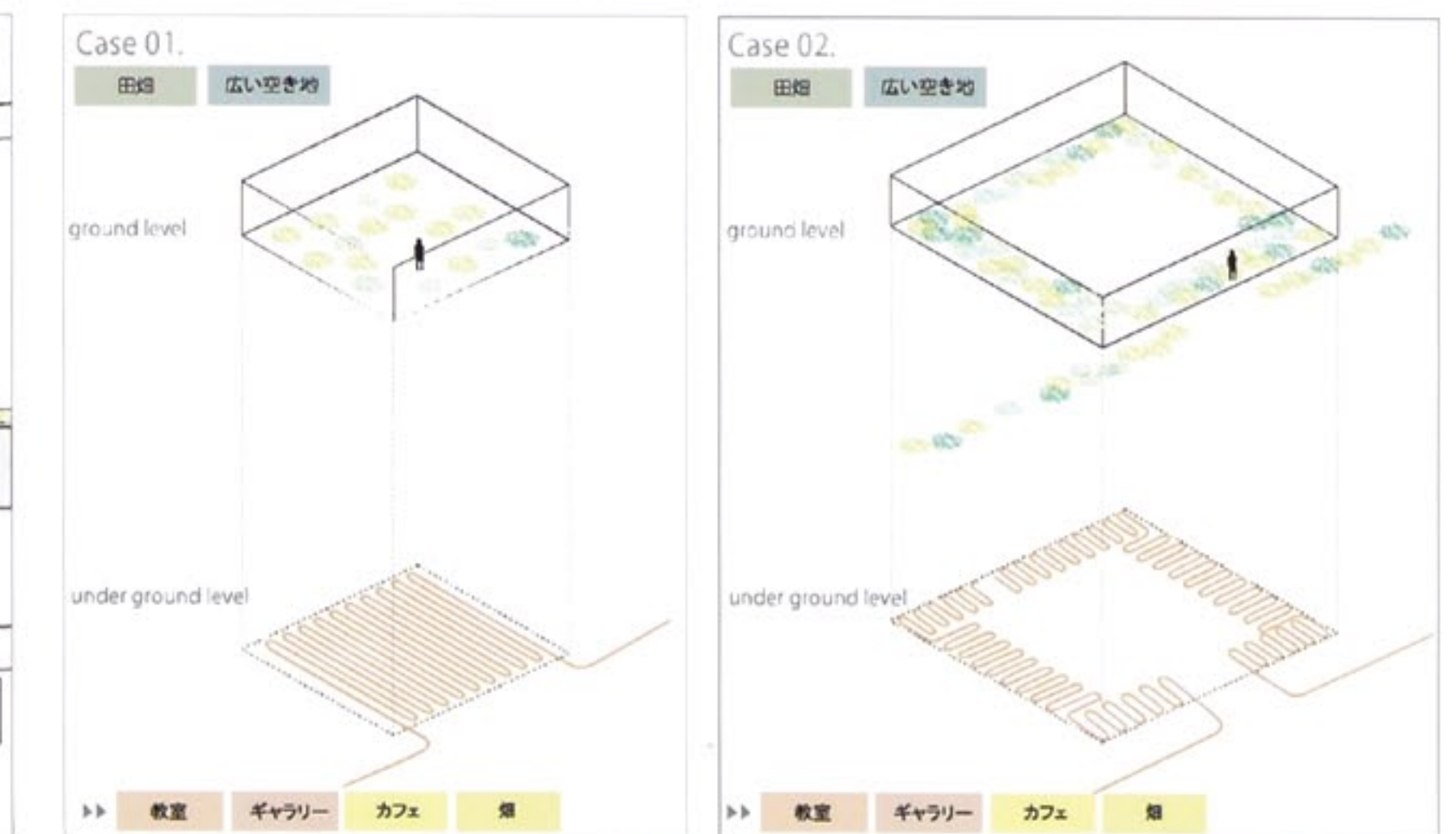


環境に気づくこと、感じること

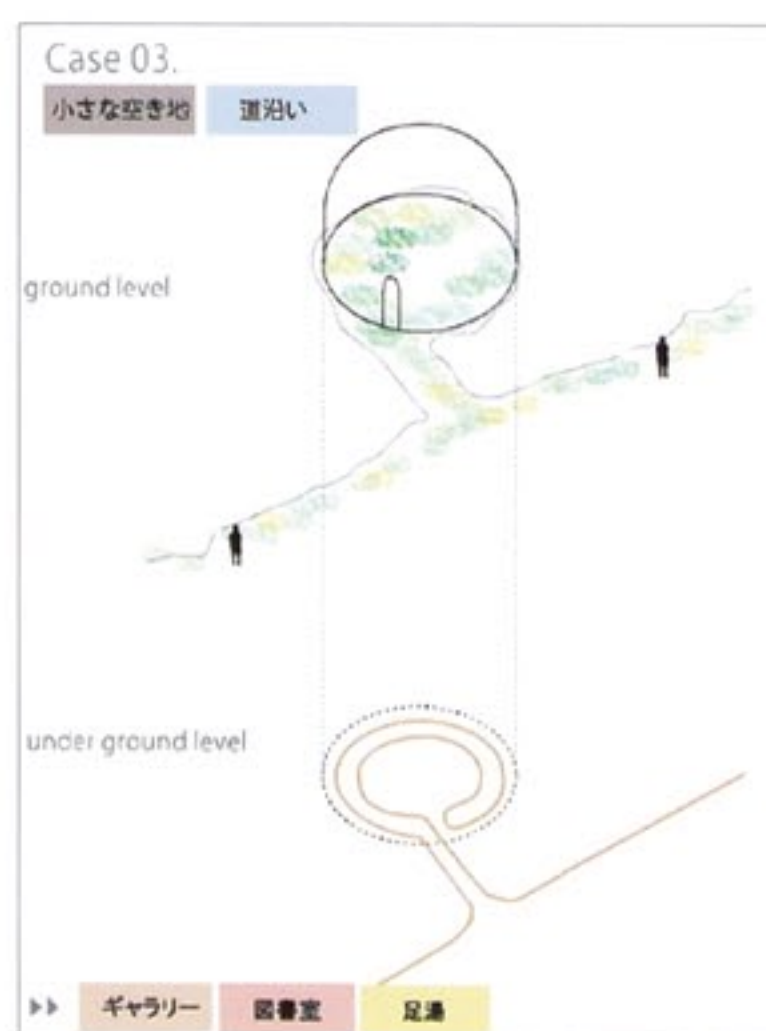
周囲の環境とほんの少し違った環境ができること。そのことにより気づき、感じる環境の変化。差異。街を渡る一本の道がこれまで意識することのなかった環境を意識づけるきっかけとなる。



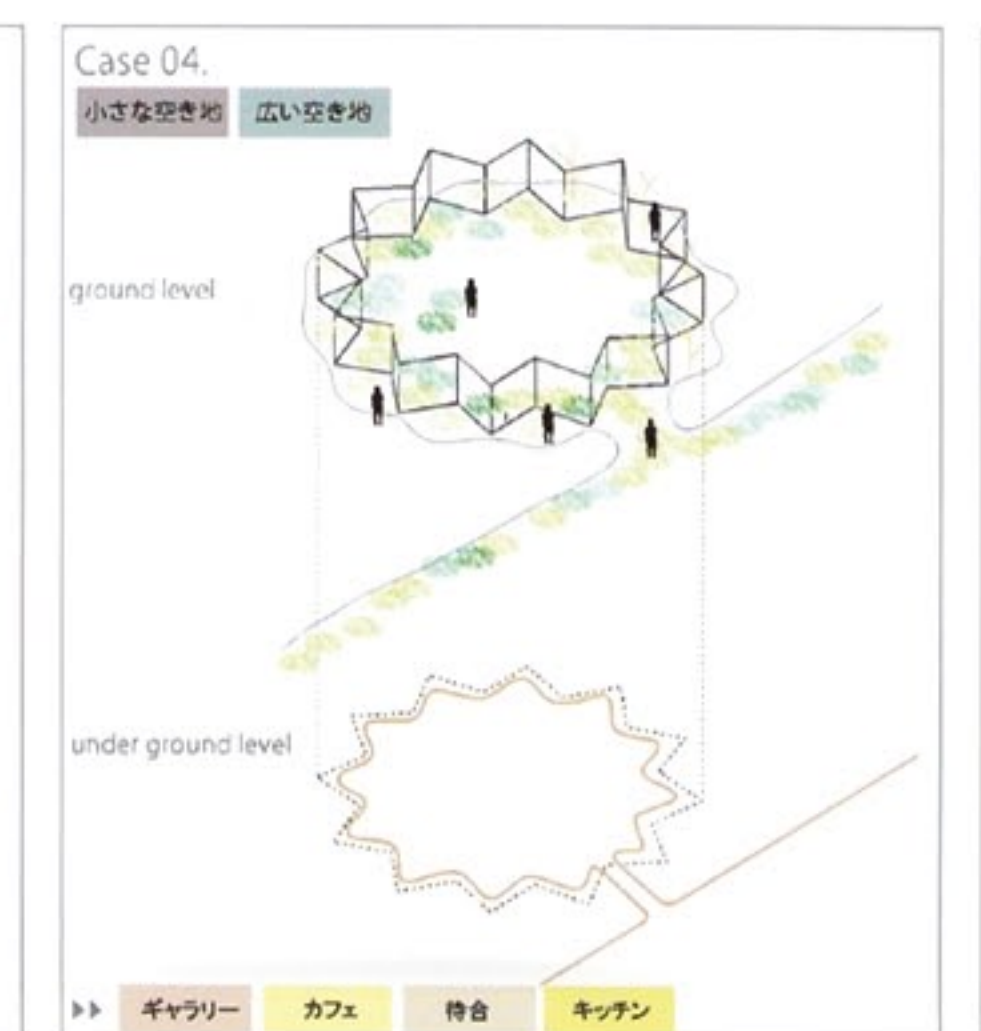
敷地図 S=1:2000



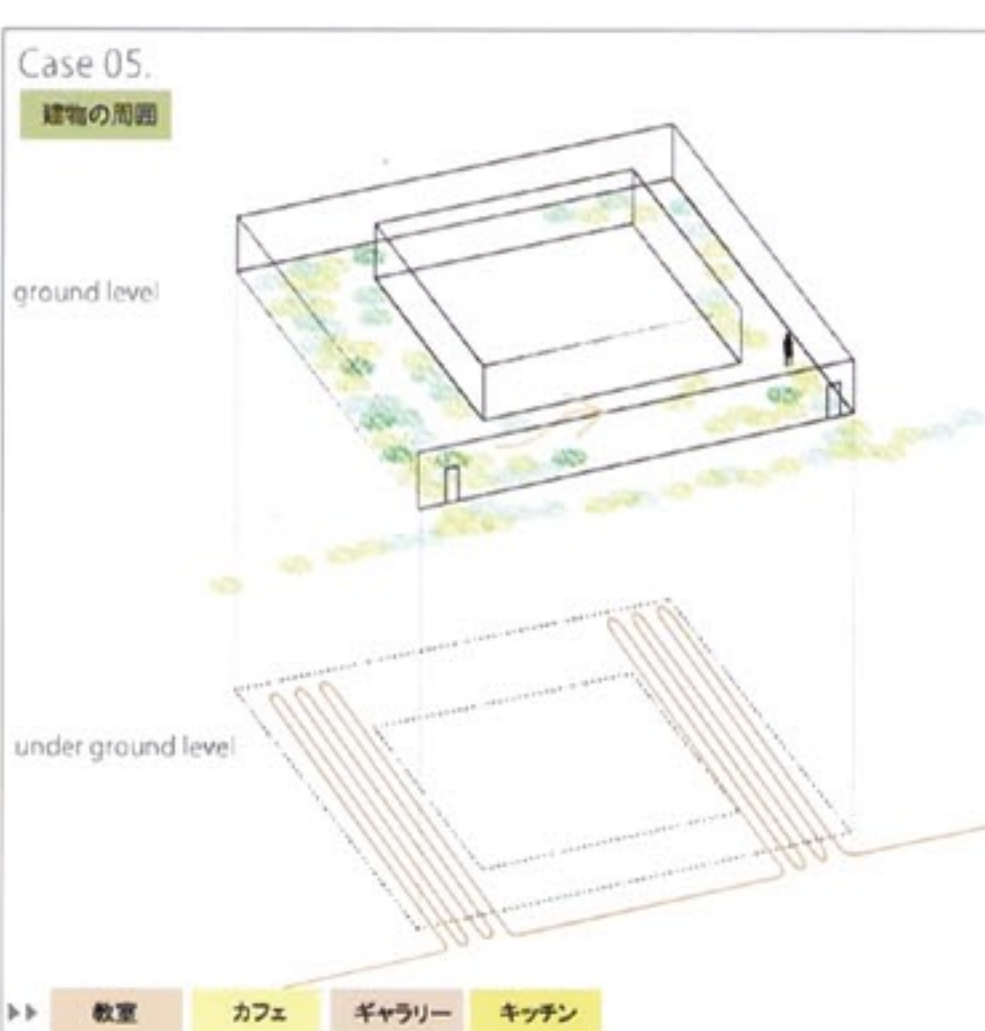
オーソドックスなボックス。草花を置いたりゆやかなな仕切りしたりして、空間の中に居場所を見つける。大面積の温室。ペリメーターゾーン部分にパイプを通すことにより、周辺に植物が、真ん中に集会所ができた。



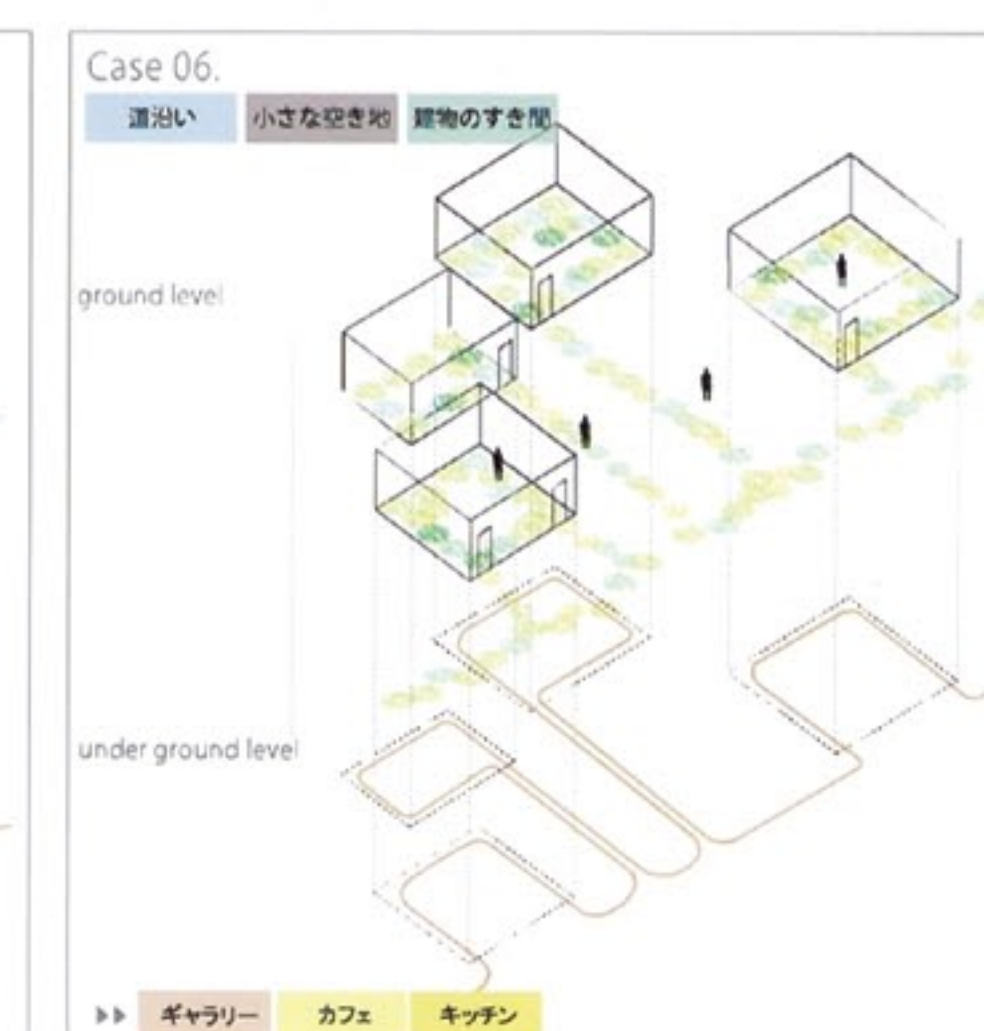
円の形の温室。円形プランは、最長のパイプで最大の面積を確保する。かまぐらのようなやわらかい空間。



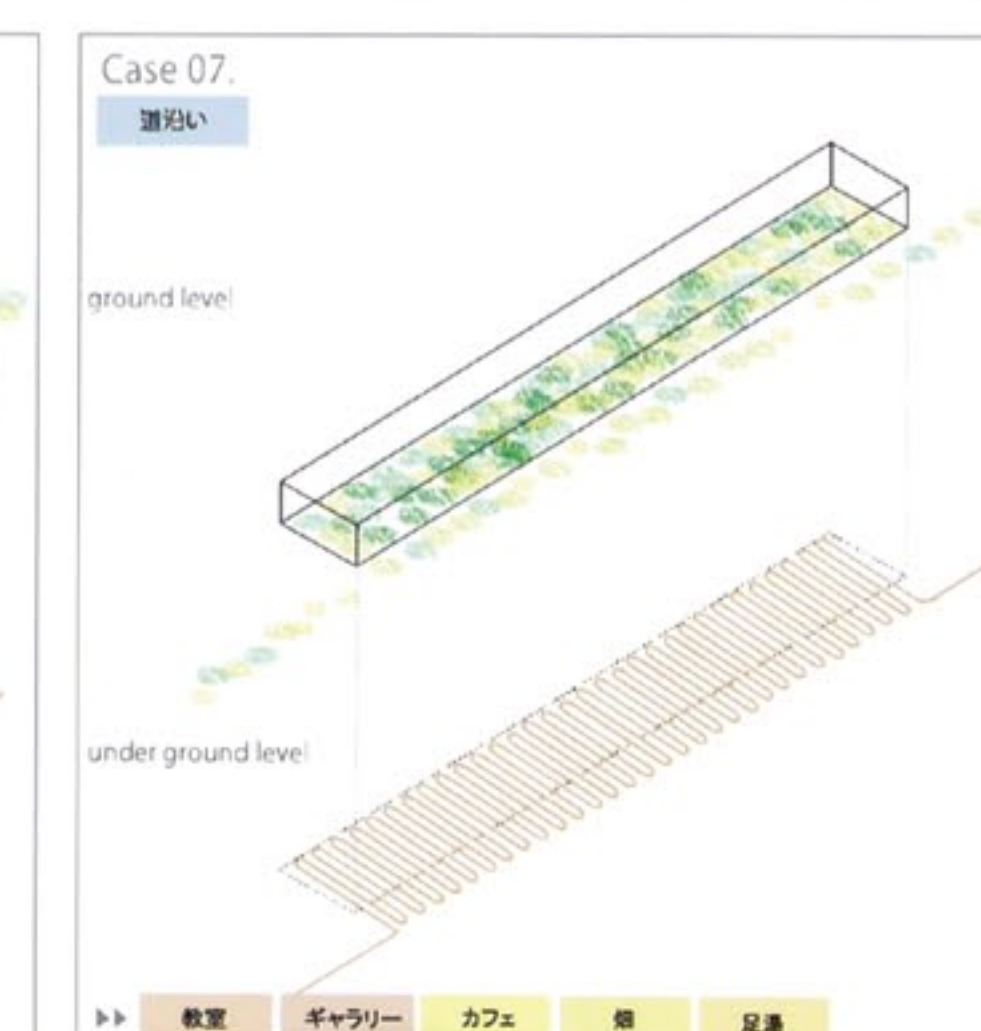
とがった温室は雪を広く溶かし、居場所が外にも広がる。視覚的につながる空間、内外の曖昧な関係。



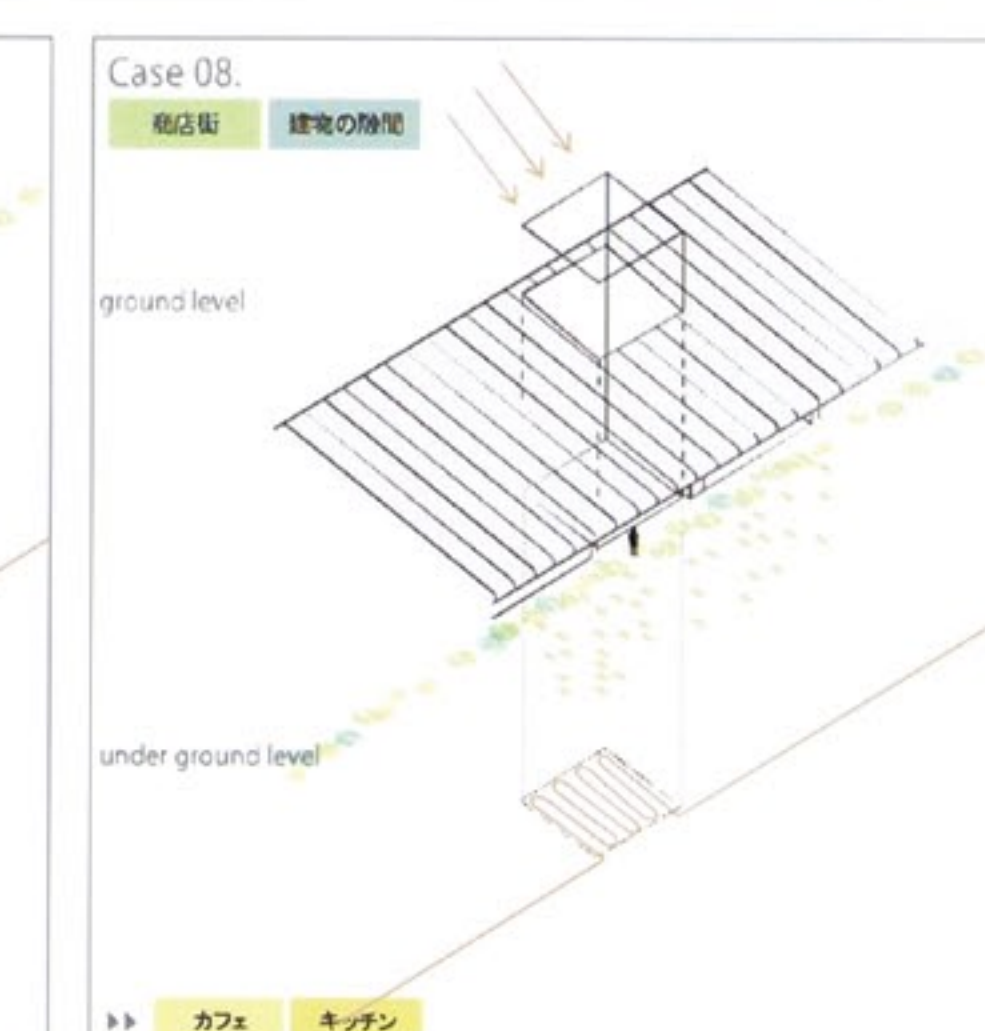
空き地や建物を囲うような温室。暖められた空間とそうでない空間が交互につながり、おだやかな空気の動きが生じる。



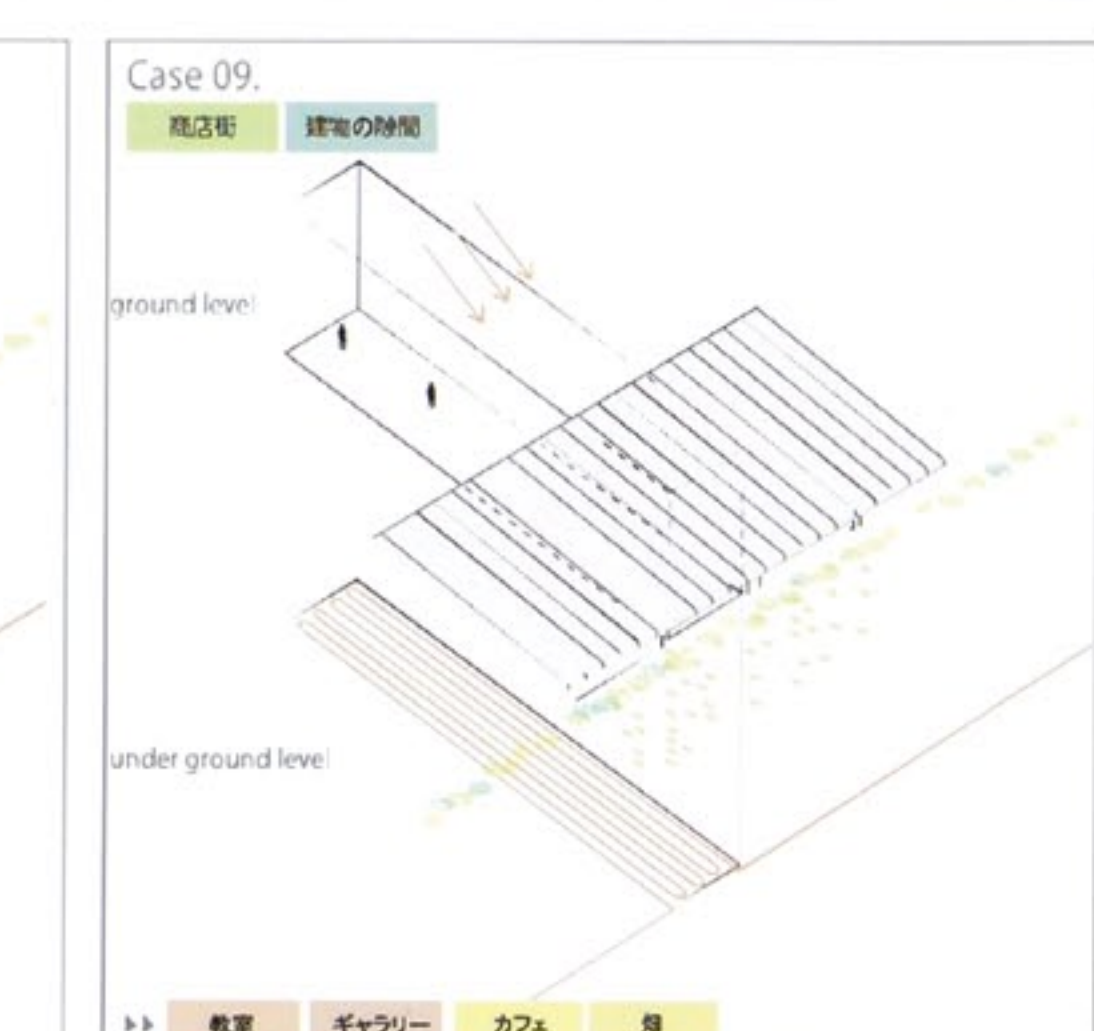
小さい部屋が集合した、分棟のような温室。空気量が少なく朝の時間から温まりやすい、微妙に異なる環境をもつ空間が並ぶ。



一本道のエントランスをもった温室。熱交換がやすく、高い暖房効果が期待できる。駅前やバス停の足湯など、あたたまる空間。



高い天井の煙突のような温室。密集地や商店街の空き家にはまる。長閑な温室。通りの表から裏まで通り抜け、光を採れた暖かい温室ができる。街の表と裏をつなぐ。



長閑な温室。通りの表から裏まで通り抜け、光を採れた暖かい温室ができる。街の表と裏をつなぐ。